

水理実験センター報告，陸域環境研究センター報告の WWWでの公開について

Opening to the Public
of the Bulletin of the Environmental Research Center
and the Bulletin of the Terrestrial Environment Research Center,
University of Tsukuba on Internet WWW Server

目代 邦康*・塩澤 暁子**

Kuniyasu MOKUDAI* and Akiko SHIOZAWA**

I はじめに

筑波大学陸域環境研究センターは、その前身である水理実験センターの設立時から、毎年継続して紀要を発行し、その研究成果を公表してきた。水理実験センター時代には、筑波大学水理実験センター報告を24号まで発行した。陸域環境研究センターに改組された後は、体裁は以前のままで、雑誌名を筑波大学陸域環境研究センター報告と改め、号数も改め、現在まで5号発行している。また、英文紀要として Environmental Research Center, Papers を17号発行している。これらの紀要は、発行部数も限られておりサーキュレーションが悪い一方で、引用される機会も多く、日本のみならず海外からの問い合わせが多数ある。また、近年、国内外の学術雑誌の電子化とWWWでの公開、さらにはセルフアーカイビングや機関レポジトリの普及といったオープンアクセスの進展など、論文の流通様式を取り巻く状況が大きく変化しつつある（たとえば、高木，2004；尾身ほ

か，2005；中野，2005；nature publishing group, 2005）。このような現状を鑑み、筆者らは陸域環境研究センターが研究成果公開のために設置しているWWWサーバーに、過去の水理実験センター報告，陸域環境研究センター報告（以下、センター報告と呼ぶ）を電子化して公開する作業を進めてきた。本稿では、その内容について説明する。

II 公開に向けての準備

公開にあたり、問題となるのは著作権の所在である。1994年12月発行の水理実験センター報告19号より、著作権が水理実験センターにあることが明示されている。そのため、それらはそのままPDFにして公開した。それ以前のものについては、著作者全員に郵便で問い合わせを行い、電子化と公開に関する承諾を取った。この際、著作権の譲渡は求めている。著作権処理の手続きに関しては、国立情報学研究所（2002）を参考にした。

* 独立行政法人 産業技術総合研究所

** 元 筑波大学陸域環境研究センター

電子化にあたり、ファイル形式は、Adobe 社が開発した文章表示用のファイル形式である PDF とした。電子化された書類のフォーマットとしてはデファクトスタンダードであり、閲覧用のソフトウェアが容易に入手できるためである。過去のセンター報告を解体し、スキャナーで読み込み、論文ごとのファイルを作製し、PDF を製作した。

III WWWでの公開

センター報告が PDF 化される以前には、過去のセンター報告の目次は、インターネット上では一部しか公開されていなかった。そのため、目次の HTML 化を最初に行い、そこから各論文の PDF ヘリンクを張った (第 1 図)。その URL は、http://www.suiri.tsukuba.ac.jp/new/publication/bull_terc.html である。今後、変更される場合もあるが、その場合は、陸域環境研究センターのホームページからリンクをたどっていけばアクセ

スできる。

過去の論文の著者やタイトルがウェブサイトに掲載されたことで、<http://www.google.co.jp> などの検索サイトから、論文を検索することも可能となった。現在、印刷所に入稿した原稿は、紙の冊子体と PDF ファイルとなって納品されている。その PDF は陸域環境研究センターのウェブサイトで即時公開されている。

IV 今後の課題

研究論文がどれだけの人に読まれているかは、論文の価値を測る上で重要な要素である。紙媒体の論文は、引用回数などで流通の程度を追跡することは可能であるが、どれだけの人に読まれているかは知ることはできない。しかし、サーバー上のファイルのダウンロード回数は可算で、その数値から過去の研究内容を再評価することが可能になると思われる。

今回の作業でスキャンニングされた論文は、



第 1 図 公開されているセンター報告の目次

文献

画像として PDF になっている。そのため論文中に含まれる語句で検索をすることはできない。これらのファイルから、OCR ソフトをつかってテキストファイルを作成し、画像ファイルとともに PDF を作製することで、より詳しい検索が可能となる。今後、過去のセンター報告をより流通させるために、この作業が必要であろう。

論文の電子化を行ったとき、論文間をリンクで結ぶことによってその利便性が向上する。センター報告には、保有している大型施設を利用した研究が多く掲載される。これらの研究は、それまでの研究成果や技術の蓄積を利用した研究が多い。WWW 上で、過去の論文にリンクを張ることにより、その研究の継続性や技術の進歩を容易に閲覧できるようになる。今後取り組むべき作業であろう。

現在、すべての論文が著者から公開の承諾を取ってはいない状況なので、全論文の公開には至っていない。今後、継続して公開の承諾をとる作業を続け、より有益なデータベースとなることが期待される。

- 尾身朝子・時実象一・山崎 匠 (2005)：研究助成機関とオープンアクセス— NIH パブリックアクセスポリシーに関して。情報管理, **48**, 133-143.
- 国立情報学研究所 (2002)：研究紀要公開のための著作権処理手引き。国立情報学研究所。
<http://www.nii.ac.jp/nels/copyright.pdf>
- 高木和子 (2004)：世界に広がる機関レポジトリ：現状と諸問題。情報管理, **47**, 806-817.
- 中野明彦 (2005)：学会誌の電子ジャーナル化から冊子体の廃止まで—日本細胞生物学会 Cell Structure and Function 誌の場合。情報管理, **48**, 1-6.
- nature publishing group (2005): NPG library News. <http://www.natureasia.com/japan/institutions/new-14.php>